

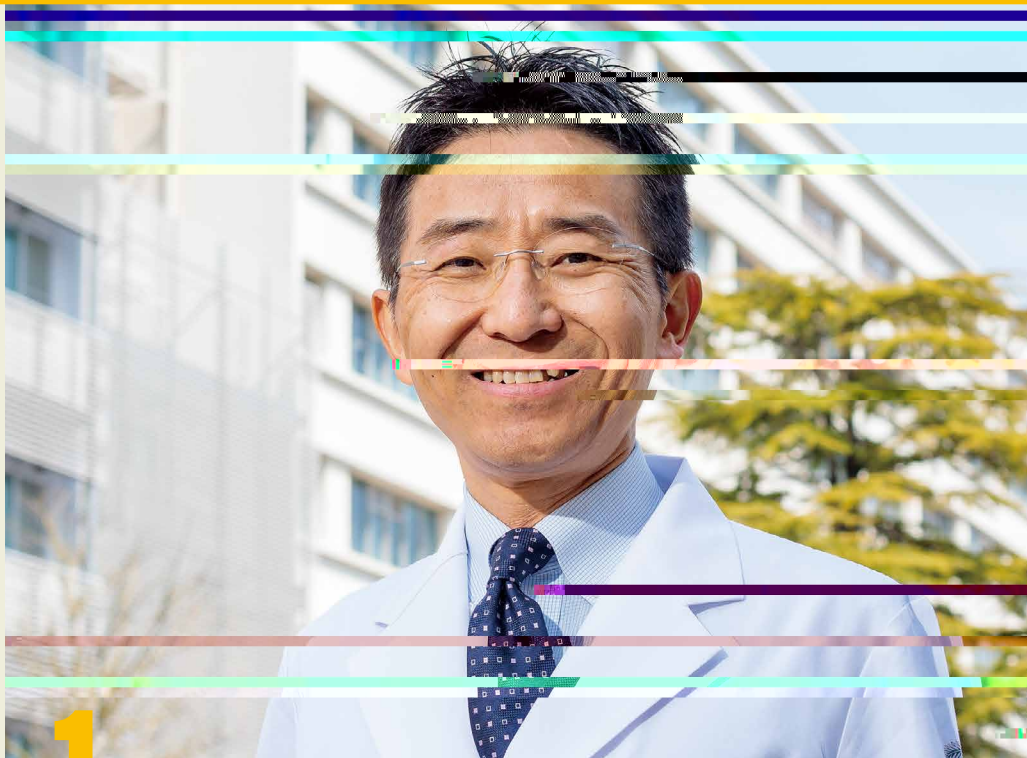
かなえない夢がある

最先端研究が開く、

# 明日への扉

世界的な手術教科書で紹介も

「学んだことの唯一の証は  
“変わること”」  
体に優しい肺がん手術を開発



原爆放射線医学研究所 教授  
広島大学病院 副病院長

岡田 守人

MORIHITO OKADA

1982年兵庫県立長田高等学校卒業。88年奈良県立医科大学卒業。同年神戸大学第2外科入局。95年神戸大学院医学研究科修了(医学博士)。99年米国コロンビア大学・胸部心臓外科にfacultyとして留学。帰国後の02年兵庫県がんセンター呼吸器外科科長。07年広島大学に腫瘍外科教授として赴任。日本胸部外科学会理事、日本呼吸器外科学会理事、日本肺癌学会理事、環境省中央環境審議会専門委員、NHK「総合診療医ドクターG」、TBS「これが世界のスーパードクター」などのテレビや文藝春秋、週刊朝日などの雑誌に頻回に取り上げられている。

## 肺

がんは罹患率・死亡率ともに高い難治がんです。この手ごわい相手に、長尺クーパーと呼ばれる約30cm

の医療用ハサミを「逆さ持ち」という握り方で自在に操り、病巣に挑んでいます。急増している小型肺がんに対しては、自らが開発した「ハイブリッドVATS」アプローチによって肺活量温存手術である高難度の区域切除を行っています。

「VATS」とは胸腔鏡手術のことで、従来の開胸手術と比べて傷が小さく、筋肉やろっ骨を切断しないため術後の痛みや機能の悪化が軽減され、社会復帰を早めることができます。皮膚切開は2カ所で、その長さは1cmの胸腔鏡挿入口と4~5cmの手術操作口。肺がんの99%に対してこのVATSを実施しています。

従来、肺がん手術では小さな腫瘍であっても、腫瘍の存在する肺葉を完全に切り除くことが標準でした。しかし、小型肺がんであれば区域切除などの縮小手術で、がん根治手術ができるようになりました。2cm以下の小型肺がんに対しては、肺活量の温存や術後の生活レベルの向上を目的に、呼吸機能温存手術を積極的に施行しています。つまり、この縮小手術に胸腔鏡手術を組み合わせることは、究極の患者さんにやさしい手術といえます。

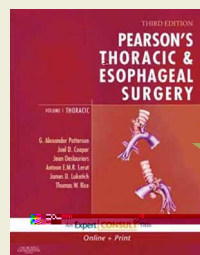
早期小型肺がんに対する根治的縮小手術の5年生存率は95%を超えています。2018年春からは手術支援ロボット「ダヴィンチ」による肺がん手術が保険適用になりました。保険適用前の累積ロボット手術数は国内トップで、今後も積極的に実施する予定です。

また、手術に関しては国際的にも高い評価を得ています。2000ページを超える厚さの『ピアソン胸部・食道外科』は、世界中の胸部外科を学ぶ学生や研修医・若手外科医にとってバイブル的な教科書・手術書ですが、その冒頭の「胸部外科手術の歴史と発展の章」において、肺がんの低侵襲手術術式の開発に関して日本人で唯一紹介されています。

最重要なミッションは自身の終わりなき切磋琢磨と他者への感謝、そして本邦にとどまらず世界で活躍できる人材の育成。ヘビは体の表面を保護している硬い皮膚が成長の妨げになってくると、脱ぎ捨てて新しい皮膚を作ります。即ち、脱皮です。新しいものを掴むには、今掴んでいるその手を開かねばなりません。大学院の時に阪神淡路大震災を、ニューヨーク留学中に9.11テロを間近に経験したことからのなのか、いつも「悔いのない

人生を」と思います。医師とは自然科学の進歩を人間の幸せ・健康のために適用する義務を課せられた知的専門職。対象は「人」であり、常にそのミッションを成就するには医学をはじめ、人間学などあらゆることを学ぶことが必要です。「学んだことのたった一つの証は変わることである」。変わる勇気を持って学び続けたいし、可能性に富む後輩にもそうあってほしいと願っています。

ハイブリッドVATS胸腔鏡手術に欠かせない30cmクーパーの逆さ持ち鋭利の刺。料理人にとっての大きな包丁のように、テコの原理でaはクーパーの長さに応じてb<c。刃先には繊細かつ強い力が伝わる。



世界で最も頻用されているピアソン胸部外科手術書の冒頭「呼吸器外科の歴史と発展」に、唯一日本人として登場し、新しく開発考案した手術手技が紹介されている。